

特集〈手〉

械での採寸の後、微調整は手の指紋の感触でピタリ。「やはり最後は人間の手なんだ！」と感動してしまいました。唯一日本が守り抜いている金賞がこの部門なのを誇らしく思えたのは私だけではなかつたと思います。

感じる・手

手は物を作り出すだけではありません。目の代

わりに物を見ること（触れる）、耳の代わりにこ
とばを聞くこと、読むこと（点字）、話すこと
(手話)、そして子どもを温かく包み込みその温
もりを感じる事、やはり、「手」は万物創生の神
様が私たち人間に下さった宝物にちがいありません。

(工房さく主宰)

かしこい「手」

永野 むつみ

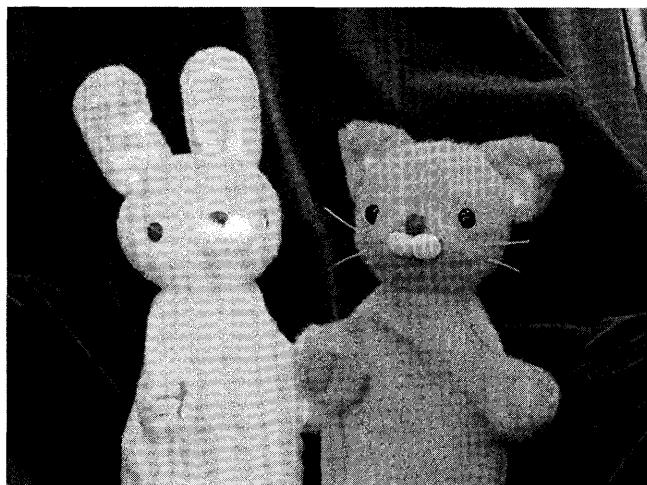
わたしは人形遣いです。

わたしは「片手遣い人形」をこよなく愛しています。

ます。ギニヨールとかハンドペベット、手をすつぱりおおうために手袋式、または指人形ともいわ

れます。私は片手遣い人形とよんでいます。観るのは何でも好きですが、演じるのは片手遣いの人形、しかも衝立の後ろで、自分の姿が見えないようにして演じるのが好きです。

近頃では、人間の演劇に人形が登場したりその逆もあり、人形が必ずしも人の形をしているとも限りません。人形劇と人間劇、さらには影絵、ダンス、パフォーマンスなどなど、さかいめがあいまいで、そうしたジャンル分けそのものがナンセンスになつてきました。いわゆる人形劇といわれるものでも、「出遣い」とよばれ、演者も人形とともに舞台に登場することが増えていて、私たちのようなスタイルはあまり多くないようです。たぶん、手を入れて遣うために人形の大きさや形に、制約が生まれてしまふからかもしれません。しかし、この「手を入れて遣う」というところが、私にとっては最大の魅力なのです。



▲ “私の人形”を作ろう
マイ



▲人形が動く

片手遣いの人形で遊ぶ

たいていの場合利き手を使います。人差し指を人形の頭に入れ、軽く薬指と中指を折り曲げ、残った小指と親指を、それぞれ人形の右手、左手に入れます。まっすぐ立つてみましょう。人形も演じる人もです。できれば脇をしめて、人形を自分の前に、できなければ、自分の身体の脇に立てます。そして人形と自分とが同じ方向を向きます。これが基本のポーズです。

まず、身体を丸めてしゃがみこんでみましょう。それからいつたん起こして、今度は伸びをしてみます。もちろん人形も演じる人も、です。そうするとたぶんあなたは気がつくでしょう、人形の動きと人間の動きがとてもよく似ていることに。人形の腹は私の手のひら、人形の背中は私の手の甲。腹を抱える感じや、反身になる感じが、

実際の自分の腹や背中の感じと似ています。演じるときに必要なイメージは、画像としてのそれではなく体に残る感覚の記憶でしょう。

人差し指の第一関節までを人形の頭に入れると、指の付け根のあたりまでが人形の首、その下から手首までが背骨、手首が腰。その下が脚で、曲げた肘のあたり上腕部が人形の足の裏だと思って動かしてみます。とりわけ腰は良く動きます。なんだって自分の手が入っているのですから安心。人形がどこを向いているのか、どんな体勢でいるのか、具合よくつかめます。

らつて、いつたん止まる。そしてちゃんと視線が合っているかどうか確認します。もつとあごをあげとか、顔を右に振って、とか言つてもらいます。向こうから合わせてもらつてはいけません。あくまでこちら側から合わせていくのです。

遊びから表現へ

誰かに人形と向き合つてもらって視線を合わせる、という稽古をすると、とたんに人形の目に力がこもり、生きているようにみえできます。視線をあわせたまま、相手の人に少しずつ動いても

このとき外側から、目で人形の体勢を確かめるのではなく、人形の内側、つまり自分の手がどんな具合なのかを感じ取ることが大切です。かがみのこの時点では余り有効ではないと私は思っています。むしろ誰かに見てもらい、率直に言つてもいいながら自分の意思と、結果としての表現のずれに気がついていく方が意味があるでしょう。人形劇は自分の「こうしたつもり」が「そうは見えない」ということがよくある世界です。率直な第三者||演出者の存在が不可欠です。その目がまさにかがみです。その目がゆがんでいたら……！

演出者の存在は演技者を育てもし、ゆがめもしま

特集〈手〉

す。演出者の目は観客の目でなければなりません。

動きのイメージをつかむ

手を緊張させ、硬直させたり、緩めたりすると人形は、まるで人間がそうしたのと似たポーズをとります。互いに抱き合つたり、なでさすったり、ぶつたり、ぶつかつたり、背を向けたり、ものを持つことも得意です。しばらくすると、このスタイルの人形ならではの動きの面白さが見えてくることでしょう。同時に「操作」というより、「人形で」演じているのだということに気がつくかもしれません。

人形と演者との関係、距離の問題で言えば、人形の内側に入り込んでしまっているという点で、糸操りや、棒遣いの人形より、仮面に近いかもしれないと私は感じています。ただ、人形の腹は私



▲『二人のお話』——はじめて出会う人形劇——

の手のひら、背は甲、という置き換えが必要で、
ここがわからないと簡単そうで難しい、と言う場
合もあるようです。かつて、知的障害者との仕事
の中で、「こんにちは」と、人形を始めたままで
自分がお辞儀をしてしまうことがままあり
ましたから。

糸操りには糸操りの、棒遣いには棒遣いの人形
が描くのにふさわしい世界があるように、片手遣
いの人形には、その形、動きの特徴を生かした描
くべき世界があるような気がします。強いて言う
なら講談ではなく落語。小説ではなく詩。短歌で
はなく川柳。人形の身体にすっぽり演じる人の手
が入っているという暖かさ、熱っぽさのようなも
のがそう思われるのかもしれません。

かしこい手

さわる、たたく、手招きする……。そつと、強

く、手かげんして……。人間が何かに働きかける
ときに、身体の部位の中でよく使われる手。とり
わけ利き手はかっこい。まさに利き手です。思い
通りに動いてくれる。手ざわりでわかることはた
くさんあります。まるで指のはらにはもうひとつ
の目がありそう。人差し指とはよく言つたもので
す。はつきり方向を示したい時は人差し指が便利
です。表現的な手。この手が、片手遣いの人形に
はすっぽり入つているのです。初めて人形劇をや
るという人には、片手遣いの人形を、とまではお
勧めしたいのです。もしあなたが、あなたの手を
信じ、ゆだねることができたら……！ ですが。
(人形劇団ひばほたあむ)